

## 順接の予測

——予測の読みの一側面——

### 一 はじめに

言語の理解主体が、表現主体<sup>(1)</sup>によって話された発話を聞いた<sup>(2)</sup>り、書かれた文章を読んだりするとき、後続の文脈を予測しながら理解しているということは、論者と関わりが深い日本語学の分野でも（寺村一九八七、平田編一九九七など）、心理学の分野でも（丸野・高木一九七九、海保一九八八など）、さらには海外の英語学などの分野でも（Oller 1983、Graesser & Franklin 1990など）、すでに共通理解になっている。もし、予測というプロセスがなければ、線条的な構造を持つ言語というものを瞬時に理解することは不可能だと考えられるからである（Beaugrande & Dressler 1981、庵一九九九）。

### 石 黒 圭

論者はこれまで、石黒（一九九六）を皮切りに、現代日本語の書きことばにおける予測について、文を単位にした記述を積み重ねてきた。石黒（一九九六）では、当該文<sup>(3)</sup>と後続文の連続性の有無を予測する「連続の予測」、後続文との連続性にくわえてその接続関係を予測する「関係の予測」、後続文との接続関係にくわえてその具体的内容を予測する「内容の予測」と、予測を三層に分けて議論し、そのなかでもとくに「関係の予測」が実際の文章の理解に役立つ<sup>(4)</sup>ていることを主張した。

石黒（一九九六）でも示したように、その「関係の予測」は当該文と後続文の接続関係の類型からさらに六つに区分できる。その六つとは、「解決すべき課題が三つある。」のような文で、その三つの課題の中身を予測させる

「成分の説明の予測」、「西日本と東日本でお正月の雑煮の作り方が違う。」のような文で、作り方が具体的にどう違うかを予測させる「文の説明の予測」、「雨が近くなると、ツバメは低く飛ぶ。」のような文で、ツバメが低く飛ぶ理由を予測させる「理由の予測」、「壁についていた赤いボタンを押ししてみた。」のような文で、ボタンを押しした結果を予測させる「順接の予測」、「もちろん、すべての人がイヌを怖がるわけではない。」のような文で、それまでと反対の展開を予測させる「逆接の予測」、「地球温暖化の悪影響は、南極氷床の融解による海面上昇にとどまらない。」のような文で、それと並び立つものを予測させる「並立の予測」である。

「成分の説明の予測」は石黒(二〇〇一b)で、「文の説明の予測」は石黒(二〇〇一a)で、「理由の予測」は石黒(一九九八a)で、「逆接の予測」は石黒(一九九八b)で、「並立の予測」は石黒(一九九九)でそれぞれ記述した。残された「順接の予測」を本稿で記述することで、文を単位とした「関係の予測」の類型の記述が完了することになる。

こうした予測の記述、整理は、日本語学への学問的貢献

はもちろんのこと、日本語教育の現場への教育的貢献も期待できる(佐々木・嶽肩二〇〇一)。後続文の展開を予測できるかどうかが文章理解の迅速さと正確さに影響を及ぼすことはすでに実証されており(平田編一九九七)、どのような形態的指標を持つ、どのような意味内容の文が当該文にきたとき、どのような予測が起きるかを知っておくことは、日本語学習者にとっても有益な情報となると考えられるからである。

## 二 調査の方法と資料

一章で述べたように、本稿での予測は文を単位にして考えている。用例の中で、当該文には実線の傍線を付し、当該文を理解した結果、予測できた後続文には破線の傍線を付すことにする。予測には、当該文だけでなく、当該文までの文脈も影響を与えている。したがって、そのような文脈がないと予測が困難になる場合、当該文の直前にある先行文もあわせて提示することにする(とくに予測に直接的な影響が及んでいる場合は、点線の傍線を付すことがある)。また、本文を要約した表現で補足説明をおこなう場合、(一)に入れて示すようにする。

実際の作業手順は次の通りである。

- ① 作品の冒頭の一文(≡当該文)を読み、隠してある後続文を予測する。
- ② 隠してあった後続文を読み、予測が当たっていたときそれを記録する。
- ←
- ①' 作品の冒頭の一文(≡先行文)の内容は既に頭に入っている。
- ②' 冒頭文の次の文(≡当該文)を読み、隠してある後続文を予測する。
- ③' 隠してあった後続文を読み、予測が当たっていたときそれを記録する。
- ←
- (以下同様の操作を繰り返す)
- ←
- ①<sup>n</sup> 作品の n 番目の文(≡先行文)までの内容は既に頭に入っている。
- ②<sup>n</sup> n+1 番目の文(≡当該文)を読み、隠してある後続文を予測する。

③<sup>n</sup> 隠してあった後続文を読み、予測が当たっていたときそれを記録する。

当該の文章の結末までこの作業を一文ずつ順に繰り返す。以降の用例は、その作業の結果得られたものうちで、順接を予測したものについて、整理、分類を施したものである。

なお、資料としては、できるだけ多くのジャンル、多くの筆者を含むものということを基準にし、中村光夫選(一九八〇)『私小説名作選』集英社文庫(「私」と表記)、『世界』主要論文選編集委員会編(一九九五)『世界』主要論文選』岩波書店(「世」と表記)、大江健三郎選(一九八三)『何とも知れない未来に』集英社文庫(「何」と表記)、『CD-毎日新聞(データ集)』(二〇〇〇年度版) 日外アソシエーツ(「毎」と表記)を用いた。

### 三 順接の予測の大枠

順接の予測は、理由の予測とは反対に、当該文が因果関係の因、つまり原因・理由になって、後続文に因果関係の果、つまり結果を予測するものである。ここではそれを大

きく二つに分けて考える。

一つは、描写文を中心とした現実世界にかかわる予測である。たとえば、「自動販売機のまえに一〇〇円玉が落ちていた」↓「手を伸ばして拾った」、「私は先生にトイレに行っていないかどうか尋ねた」↓「先生は急いで行ってきなさいと答えた」のようなものがそれに当たる。いずれも、表現主体の視点が、描かれている場面のなかにある、いわば場面依存적であるという点で共通している。こうした予測では、前者の例のような当該人物の視点や外界の認識、後者の例のような当該人物の意志や他の人物への働きかけが重要な意味をもってくる。

もう一つは、説明文を中心とした論理世界にかかわる予測で、「東南アジアでは、農村から都市に流入する人が多く、反対に都市から農村に入る人が少ないという状況が続いている」↓「都市の過密化、農村の過疎化が着実に進行している」や、「このところ、政府の高官が公金を横領する事件が相次いで摘発されている」↓「このような官僚腐敗の現状は早急に是正する必要がある」のようなものがそれに当たる。いずれの場合も、表現主体の視点は説明をしている現時点に置かれており、現実の場面や時間に支配さ

れることは少なく、あくまでも論理によって構成されている。ただし、前者の例では表現主体の主體的な判断が介在しない、事態↓事態の必然的論理展開であるのにたいし、後者の例では表現主体の主體的な判断が介在する、事態↓判断の主観的論理展開であるという点で異なっている。

以下では、順接の予測を、上述のように、現実世界にかかわる予測と論理世界にかかわる予測に分け、前者を四章から九章で、後者を一〇章と一一章で見えていくことにしたい。

#### 四 外界の出来事↓結果

ここでは、当該人物が観察している先にある外界の変化によって起こる結果の予測について見る。当該人物の意志が介在することはない。

「晴れる」↓「洗濯物が乾く」、「暑くなる」↓「汗が出る」など、当該人物の意志とかわりなく成立する因果関係が私たちの身の回りには数多くある。当該文がそうした因果関係の前件になると、読み手は後件である後続文にその結果を予測することになる。このような予測を引き起こしやすい形態的指標は、「割れる」「倒れる」「折れる」「爆

発する」など、何らかの意味で二次的な結果を引き起こしやすいつ変化動詞である。

(1) 放課後の教室。友だちと遊んでいるうち、和美ちゃんの投げたボールが天井のライトに当たり、割れた。ガラスが床に散乱した。(毎〇三二六朝)

### 五 外界への働きかけ↓結果

ここでは、当該人物が、その周囲にある人間以外の対象や状況に働きかけることによって生じる結果の予測について見る。多くは何らかの目的を持っておこなわれる行為であり、後続文にはその結果が描かれることになる。たとえば、(2)では、蟻を指で圧えつけるという行為が当該文に、圧えつけるという行為によって蟻が動かなくなるという結果が後続文に描かれている。「圧えつける」のほか、「たたく」「打つ」「ける」「当てる」「ぶつける」など、何らかの意味で二次的な結果を引き起こす動作動詞が、こうした予測を引き起こしやすい。

(2) ふと僕の掌の近くに一匹の蟻が忙しそうに這って来た。僕は何気なく、それを指で圧えつけた。と、蟻はもう動かなくなっていた。(何一四頁)

科学の実験などで結果がどうなるかということを確認しているような文脈で、このような予測はよく現れるが、その場合、「てみる」という文末表現が形態的指標になることが多い。

(3) それでは、どんな野菜、果物を食べたときに白血球の数が增えるのだろうか。帝京大学薬学部の山崎正利教授(がん免疫学)のグループは、マウスを使って実験を行った。まず、キウイの果汁を腹に注射してみた。すると白血球のひとつの好中球が急激に増えた。(毎〇三〇一朝)

また、「調べる」のたぐいも「てみる」と似た働きがある。具体的には、「調べる」のほかに、「探す」「探る」「搜索する」「調査する」「分析する」「比較する」「実験する」などと幅広い。これらは「てみる」の形を取らなくても順接の予測として働くことが容易である。

(4) 私は錯乱した畳や襖の上を踏越えて、身につけるものを探した。上着はすぐに見つかったがズボン求めてあちこちしていると、滅茶苦茶に散らかった品物の位置と姿が、ふと忙しい眼に留まるのであった。(何二〇頁)

さらに、結論を出すための行動として、「話しあう」のたぐいがある。このグループには、「話しあう」のほか、「協議する」「検討する」「討議する」「議論する」などがある。やはり、これらも、話し合いの結果を予測させるという点で、順接の予測を喚起する。

(5) 衆院議院運営委員会は一二日の理事会で、二〇日召集の通常国会の日程について協議した。その結果、与野党は、二〇〇〇年度予算案が提出される二八日に首相の施政方針演説など政府四演説を行い、各党代表質問を三一日と二月一日に行うこととで基本的な合意した。(毎〇一四朝)

当該人物が目的を達成するためにおこなう行為のなかで目立つのは、知覚にかかわる行為である。そのなかでも一般的なのが、「見る」「眺める」「見上げる」「見下ろす」「見回す」「顔を向ける」などの知覚を目的とした動作である。「(口)に入る」「(口)に入れる」「(口)にさわ」など、視覚以外の動作もある。次の(6)では「見上げた」が知覚を目的とした動作に当たる。

(6) 私は彼を中途に待たしておき、土手の上にある給湯所を石崖の下から見上げた。すると、今湯気

の立昇っている台の処で、茶碗を抱えて、黒焦の大頭がゆっくりと、お湯を呑んでいるのであった。(何一七頁)

知覚を目的とした行為はこうした動作にかぎらない。知覚を可能にするような状況を作り出す行為もまた、この種の予測を生み出す。そうした行為には二種類あって、一つは(7)のように対象に働きかけて知覚を可能にする行為、もう一つは(8)のように当該人物の見位置を変えることによって知覚を可能にする行為である。

(7) 誰かが苦しんでいる。私は立ち上って六畳のまとのあいだの襖をあけた。妻がすみっこのたんすの下のところまで地虫のようにくぐまわってうなづいた。(私二八二頁)

(7) では、誰が苦しんでいるのか、そのうなり声だけではわからない。そこで、視点人物である「私」は、襖を開けることによって、誰が苦しんでいるのか、視覚的に確かめられる状況を作ったのである。「襖をあける」のほかに、「ものをどける」「ポケットから取りだす」「光を当てる」などがある。

一方、(8)は、「私」が場所を変えることによって知覚

が可能になった例である。

(8) 私は石崖を伝って、水際のところへ降りて行ってみた。すると足許のところを、白木の大きな函が流れており、函から喰み出した玉葱があたりになんて深っていた。(何二四頁)

見る位置が変われば、それまで不可能だった認識も可能になる。こうした行為は「行く」のほか、「近づく」「外に出る」などの移動動詞によって表すことができる。

#### 六 外界からの働きかけ↓対応

ここでは、当該人物がその周囲にある状況から働きかけを受けたとき、その働きかけにたいする当該人物の対応や心情の予測について見る。まず、目的を生む状況の認識と、目的のある行為の組み合わせから見てみる。(9) では、木片にすがっている少女が川上から流されてくるという状況が存在し、それを当該人物である「私」が認識している。そのような状況を「私」が認識している以上、それに対応するような行動をとるだろうと理解主体は予測をすることになる。

(9) 私が玉葱を拾っていると、「助けてえ」という声

がきこえた。木片に取絡りながら少女が一人、川の中ほどを浮き沈みして流されて来る。私は大きな材木を選ぶとそれを押すようにして泳いで行った。(何二四頁)

なお、「私が玉葱を拾っていると、「助けてえ」という声

がきこえた」という文に着目すると、九章で見る「他の人物からの働きかけ↓対応」になる。

この対応すべき状況には、一般的な傾向があり、上の(9)に見られるような、問題のある状況、危機的な状況が多く、恵まれた状況、整った条件に対応するというものはあまり見られない。その意味で、この「対応すべき状況の認識↓対応」では、問題状況の認識と問題解決方法の対が典型であると考えるよじだろう。問題のある状況を表す形態的指標としては、(10)のような「できない」のほか、「しかなない」「する恐れがある」「せざるをえない」などがある。

(10) (ナチスドイツ軍によって教会の礼拝堂にオラ  
ドゥル村の村民が閉じ込められている状況下で)  
導火線をつたってきた火花がたちまち箱に達する  
と大爆発がおこり、室内は黒い煙がいっぱいたち

こめて息もできません。みなもう息がつかまって、叫びをあげながら、風通しのありそうな場所をめざして殺到します。(世八三九頁)

実生活においても周囲の状況に一喜一憂するように、当該人物の視点になりきった読み手は物語世界で出会う出来事にも一喜一憂する。これは多分に内容的な問題であるため、ある感情を引き起こす形態的指標は指摘しにくい。(11) のようなものである。

(11) 「おふくろは、夫がかつて所持していた拳銃が嫌いだだったが、夫の死後その行方を知らなかった」ところが、それから何十年も経ったいま、とつくの昔に手放したとばかり思っていたその拳銃が、おふくろの目の前にごろりと転がり出たのである。おふくろは、裏切られたような気がしたのかもしれない。(私四一一頁)

七 内面からの働きかけ↓実行

六章で「外界からの働きかけ↓対応」を見た。この「外界」と対になるものは、人の内面である。人は心を持っている以上、外界からの情報だけでなく、内面から湧きあが

る意志や気持ちによっても行動する。そのことが予測にも反映されている。

当該文で当該人物の意志や希望、当為的判断が描かれると、後続文では、そうした当該人物の心に決めたことが実行されることを予測することになる。

(12) ぼくは女の表情と、男の表情とを、もう少しくわしく見たかった。で、人だかりのうしろから近づいて、気づかれぬように目をすえてみた。(私三〇二頁)

当該人物の気持ちは、「たい」「ことを望む」「と願う」などの希望の表現、「ことにする」「ようと思う」「と決心する」などの意志の表現、「なければならぬ」「てはならない」「必要がある」「ざるをえない」などの当為の表現など、評価のモダリティ形式で表される。

八 他の人物への働きかけ↓反応

ここでは、当該人物が他の人物に働きかける文が当該文に來ること、後続文にその人物の反応を予測するものを見る。

まず、当該文で相手の意向を問うものがある。後続文で

は、相手はその問いかけに答えることは予測するが、その答える内容は予測できない。「聞く」「尋ねる」「質問する」「問う」などの質問を表す動詞や、「相談する」「話をする」「打ち明ける」「うかがう」などの相手の感想や意見を聞く動詞などがある。

(13) 「学生結婚すると学費が安くなる」という噂について、そこで、大学関係者に直接聞いてみた。すると、「一切ありません」(前出A大)、「少なくとも、学生結婚が理由では、そんな制度はない」(前出B大)と、どちらも制度の存在を否定した。

(毎〇七二九夕)

それから、相手にたいする態度を含んだことばで働きかけるものがある。「ほめる」「しかる」「からかう」「冷やかす」「笑う」「怒る」「どなる」など、態度をとまなう伝達動詞で表される。理解主体は相手がどんな反応をするか期待しつつ読みすすめる。

(14) (クリントン) 大統領は彼女(ヒラリー夫人)

をつついて「ごらん、アイツと結婚していたら、キミは給油係の女房だったんだ」とからかった。彼女は平然と言い返した。「とんでもないわビル、

私があつ男と結婚していたら、彼こそ大統領だったのよ」(毎一一二二夕)

それにたいし、相手にことば以外で働きかけるものがある。相手が、行動で返してきくことも、ことばで返してきくことも、相手の心情のみが描かれることもあり、相手の具体的な反応は予測できないが、相手が何らかの反応をすることは予測可能である。「さわる」「なでる」「なぐる」「ける」などの対人的働きかけの動詞がこれに当てはまる。(15) の「投げつけた」もそうした対人的働きかけの動詞と考えてよいだろう。

(15) 彼は机の上の燐寸の箱を子供めがけて投げつけた。

子供も負けん気になって自分めがけて投げつけた。(私一五五頁)

まず、当該文が当該人物の強い態度を示しており、相手がそれを受けいれるか拒むかを迫られているものがある。この種の予測を引き起こす動詞は、(16) の「要請する」のほか、「要求する」「命令する」「求める」「迫る」など、行為要求を表す動詞が中心である。

(16) 国連ミレニアムサミットに出席している森喜朗

首相は六日夕(日本時間七日朝)、米ニューヨ

ク市内のホテルで中国の江沢民国家主席と約三〇分間会談した。森首相は、日本と朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)との国交正常化交渉に対する中国政府の側面支援を要請した。江主席は「朝鮮半島の和解が進み、森首相が示した方向を私も望んでいる」と応じ、日朝国交正常化に期待を表明した。(毎〇九〇七夕)

また、使役の「させる」も行為要求的な側面を持っており、こうした予測にしばしば出現する。

(17) 早稲田大学理工学部(新宿区)でも、最大二時間までの遅刻を認め、遅刻者には別室で試験を受けさせた。一万四九八六人の志願者のうち、六〇〇人が別室で受験した。(毎〇二二六夕)

それになりたいし、当該人物があまり強くない態度で、相手に何かを要求することもある。「頼む」「お願いする」「依頼する」などの依頼を表す動詞、「提案する」「助言する」「忠告する」などの勧めを表す動詞がある。

(18) 前里さんらは、この炎を島にと考え、手紙で「ライフ」に頼んだ。代表のマンスク・パテル氏が快く応じてくれ、その炎をもって島を訪れた。

(毎〇八一七朝)

さらに、コミュニケーションにかかわる、社会的に慣習化された特定の反応を期待するものがある。「手を振る」「挨拶する」「声をかける」「扉を叩く」などがある。

(19) ちょうど一週間前、世津子がいつも使っているオーデコロンを買って、病室の扉を軽く叩いた。付き添いの女は、どうぞ、と言って、わたしを部屋に通すと、うれしそうに外へ出て行った。(何二三五頁)

なお、この「他の人物への働きかけ↓反応」では、恩恵的な働きかけを表す授受表現「てあげる」「てやる」が形態的指標になることがある。

(20) 夫と知り合って初めての誕生日に、私は手作り料理で祝ってあげた。夫は「誕生日を祝うのは初めてや」と感動してくれた。(毎〇七二八朝)

#### 九 他の人物からの働きかけ↓対応

ここでは、他の人物が当該人物に働きかける文が当該文に来ることで、後続文に当該人物の対応を予測するものを見る。八章「他の人物への働きかけ↓反応」と逆の関係に

なる。

まず、当該文で相手に意向を問われるものがある。(13) のところで見たように、「聞く」「尋ねる」「質問する」「問う」などの質問を表す動詞や、「相談する」「話をする」「打ち明ける」「うかがう」などの相手の感想や意見を聞く動詞などがあり、当該人物の発話が予測される。

(21) 「火は燃えて来そうですか」と傷ついた少女は奮えながら私に訊く。

「大丈夫だ」と教えてやると、「今、何時頃でしょう、まだ一二時にはなりませんか」とまた訊く。(何二八頁)

「ほめる」「しかる」「からかう」「冷やかす」「笑う」「怒る」「どなる」など、態度をとまなう伝達動詞で相手から働きかけられると、当該人物の行動、発言、心情など、何からの反応が期待される。(22) では「ですな!」という言い方が「冷やかした」と相まって、当該人物の不愉快な気持ちやそれを露わにする態度を予測させる。

(22) 「美少女ばかりを小説に書く作家の杉田に向かっ  
て」

「少女万歳ですな!」

と編輯員の一人が相槌を打って冷かした。

杉田はむっとしたが、下らん奴を相手にしてもと  
思って、他方を向いて了った。(私二三頁)

相手からことば以外で働きかけられるものも同様に、当該人物の何らかの反応が予測される。「さわる」「なでる」「なぐる」「ける」などの対人的働きかけの動詞がこれに当てはまる。この「他の人物からの働きかけ↓対応」においては、当該人物に視点があるため、視点の関係で(23)のように「殴る」だけでなく「殴られる」と受け身になることも多く、受け身になったほうが予測の誘発力は強いように感じられる。

(23) 中学時代、授業中に数人の生徒が騒いだため、野球部の顧問だった教師は全員のしりをバットで殴った。大半はまじめな生徒だったが、連帯責任という訳の分からない名目で全員が殴られた。青あざを見て、まじめにやるむなしさを感じた。(毎〇三二一朝)

(16) のところで見たような「要請する」「要求する」「命令する」「求める」「迫る」など、行為要求を表す動詞による強い態度で、相手から迫られることもある。

(24) 私たちの組は五時ごろまで待たされた挙句、この町の造り酒屋の前に行くように命ぜられた。それで造り酒屋の前に行って待機した。(何五一頁)

もちろん、「頼む」「お願いする」「依頼する」などの依頼を表す動詞、「提案する」「助言する」「忠告する」などの勧めを表す動詞などによる控えめな態度で、相手から要求されることもある。

(25) 寝たきりの一人暮らし女性から猫の世話を頼まれた。猫が女性の支えなので、事業所に内証でやった。(毎〇九二五朝)

さらに、コミュニケーション上の働きかけに関わる表現「手を振る」「挨拶する」「声をかける」「扉を叩く」などもある。(26) では「声がする」がそれに当たる。

(26) ペしゃんこになった建物の蔭からふと、「おじさん」と喚く声がする。振返ると、顔を血だらけにした女が泣きながらこちらへ歩いて来る。(何一九九頁)

なお、この「他の人物からの働きかけ↓対応」においては、受け身のほかに、恩恵的なやりとりを表す授受表現「てもらおう」「てくれる」も形態的指標になりうる。後続文

では当該人物がその恩恵にあずかることが予測される。

(27) 木内君の細君は、母屋の朝風呂をわかしてくれ  
た。私はお湯にはいつて来ると、また「と寝入り  
してお昼すぎに目をさました。(何五五頁)

#### 一〇 必然的論理展開

ここでは、表現主体の主観が介在しない、論理の積み重ねによって予測可能な、必然的な論理展開の予測について見る。(28) のように、一つの前提から後続文に論理的帰結が導かれるのを予測することはさほど多くなく、現実には、(29) 以降のように、複数の前提があってそれを組み合わせるものが多くを占めている。

(28) 自動車の保有台数に比べると、道路延長は名目  
的には、ほとんど増えていない。したがって、自  
動車一台当たりの道路延長は年々減少している。  
(世九六七頁)

複数の前提を組み合わせるものであるが、まず、二つの類似した前提が相互に働きあって、論理的帰結の予測を可能にしているものについて見る。二つの類似した前提という、典型的には大前提と小前提によって導かれる三段論

法である。厳密な意味での三段論法は実際の文章のなかにほとんど出てはこないが、(29) のような三段論法的なもの散見される。(29) でいえば、「日本の選挙は、地元の有権者に誰がどのくらい利益をもたらしてくれるかという次元で行われる」という大前提的なものと、「そうした利益をもたらすことができるのは与党の政治家だと信じられている」という小前提的なものが、「したがって、与党の政治家が当選する」という結論を導き出すしくみになっている。

(29) こんにち日本の選挙は、政策をえらぶという次元で行われるものではない。有権者個人や地域の利益、あるいは所属する組織の利益を、誰がどのくらいもたらしてくれるのかということに選択の基準を置く人々が多数にのぼる。その利益も、抽象的な利益では決してなく、目に見えるもの、もっとあげすけに言えば金銭に換算できる具体的な利益でなければならない。その実体は、税または国・自治体の債務として集められた金を、こっちにくら寄越すのかという要求である。そのような要求に応えることができるのは、政府

の役人を指揮監督、あるいは役人に懇願できる与党の政治家たちであると信じられている。したがって、与党の政治家は与党に籍を置くことで集票が容易となり、選挙結果はいつも与党の過半数確保となる。

(世九二三頁)

次に、二つの対立した前提が働きあって論理的帰結の予測を可能にしているものについて見てみる。ただ、対立する前提の場合に考えておかなければならないのは、類似した前提の場合とはことなり、対立した前提同士がまともなぶつかりあっても論理的帰結に至らないということである。対立した前提の一方を否定し排除するか、ないしは相互を調整して妥協をはかるか、そのいずれかの方法をとらなければならぬ。

まず、対立した前提の一方を否定する場合であるが、当然のことながら表現主体の見解を示す前提が肯定され、そうでない前提が否定される。(30) のように、表現主体の見解を示す前提は後から提示され、そうでない前提は先に提示され、否定される。

(30) 現在は脱イデオロギーの時代だという人もおります。たしかに古いイデオロギーだけでは処理で

きなくなつた時代だといえます。

しかしおよそ一定の価値体系という意味でのイデオロギーを欠いた人間社会というものは、そもそも存在できません。よかれあしかれ人々を結びつけるセメントとしての価値観を軽んずるイデオロギー無用論は、浅薄というほかはないと思います。(世八〇六頁)

一方、(31)のように、相互を調整し妥協の道を探るものもある。

(31) レーガン主義は「政治は何でもできる」という立場を否定したが、しかし「政治は何もできない」という彼らの立場も短い生命を終えた。残されたのは中間の立場である。(世九五六頁)

他には、第一の前提から出発して、その具体的論証が第二の前提としてその後展開され、そして第一の前提へ戻ってくる論理の流れを持つものがある。

(32) 日本が世界最大の公共投資国であるということは、とりもなおさず日本は「土建国家」と呼べることを意味している。たとえば国民経済計算の国際比較で一般政府の目的別最終消費支出の構成比

を見ると、俗に「軍事大国」あるいは「軍事国家」などと呼ばれるアメリカ、ソ連、韓国などは目的分類の「防衛」の比率がきわめて高い。また、「福祉国家」を実現しているとされるスウェーデンなどは「社会保障福祉サービス」の高率が際立っている。公共投資を同じ分類で比べることはできないが、中央、地方の政府、公共企業体などが支出する金のなかで公共事業費が際立っている国があれば、それを「土建国家」と名付けても一向におかしくないであろう。(世九一七頁)

(32)の第一文が第一の前提である。この文が起点となつて「たとえば」で始まる第二文、第三文で具体的論証が第二の前提として展開される。そしてその具体的論証の帰着点が第四文であるが、この第四文の内容は第一文の内容とほぼ同義となっている。

この予測をせまい視野で眺めると、「防衛の比率が高い国が軍事大国あるいは軍事国家、社会保障福祉サービスの比率が高い国が福祉国家と呼ばれる」という内容をもつ第二文、第三文が前提となつて、そこから第四文「それならば、公共事業費の際立っている日本のような国は土建国家

と呼べる」という論理的帰結に至る「前提↓論理的帰結」の予測といえるのであるが、実際には「日本が世界最大の公共投資国である」ということは、とりもなおさず日本は「土建国家」と呼べることを意味している」という第一文があつてこそ第四文の論理的帰結が予測できるのである。

出発点の前提に回帰するこうしたレトリックは、段落内だけでなく、章や節といったより大きな単位、さらには文章全体の冒頭と結末の対応などにもしばしば見られ、一元の前提に回帰することで当該の単位の統一感を強くすることが可能になる。

#### 一 主観的論理展開

ここでは、表現主体の主観が介在する主観的な論理展開の予測を見る。必然的論理展開の当該文は、論理の積み重ねによってできた、後続文を導き出す前提となる文であったが、主観的論理展開の当該文は、その文を見たらある判断や感情を抱かざるをえないような、主観的な態度を誘発する力の強い事態を描いた文が来る。

ある事実が当該文で示され、後続文でその事実にたいする表現主体の判断が来ることを予測できるとすれば、その

事実が後続文の判断の材料となることがわかるような特徴を備えているということである。そのような事実を類型化することは困難なので、典型的と思われるいくつかの例を示しながら考えてみたい。

(33) 福田前首相から辞任を迫られた(太平) 首相は、「死ねというのに等しい」と答えたと伝えられている。権力のための権力を争うのがこれまた権力闘争の本質であるが、せめて新聞にむかつては、自分が辞めればこれこれのことができなくなると訴えることができなかったものであろうか。(世

八三二頁)

(34) たがいに筆談を用いねばならなかったから、はじめわたしは、「旧満州」とか「関東軍」とか「第二次大戦」とかいろいろなことばをならべて、「中国残留日本人孤児」の問題を相手にわからせようと試みたのだが、そのうち彼は、ああわかったという面持ちで、それはこういうことでしょうと、〈日系中国人〉と書いてみせた。そして、中国には五十数種の民族が存在すること、〈日系中国人〉もそのひとつとして位置づけられているの

だと説明した。わたしはそのとき、一面だけを見ていたメダルの他の一面を示されたような、ある種の新鮮なおどろきをおぼえた。(世九三〇頁)

(33) の当該文のように、辞任を迫られて「死ね」というのに等しい」と答える首相の姿は、権力に固執する権力者のみじめな姿として受けとられ、一般市民である理解主体は反発を覚えずつ後続の文を読むことになる。つまり、理解主体の心理的な印象がそのまま予測につながる。

同様に、(34) の当該文は、中高年の人々にたいして使う「中国残留日本人孤児」という何とも落ち着かない用語が、中国では日系中国人というドライな用語でとらえられているという事実が述べられている。理解主体はその事実を「なるほど」と興味深く受けとめ、その印象をそのまま予測につながるものと見込まれる。

この二つの例を見て感じることは、それぞれの当該文が何らかの意味で印象的な事実であり、理解主体がそこから感じた印象が後続文の予測として働いていること、そして、その印象的な事実が、表現主体以外の人物の引用から構成されていることである。一般化できるような形態的指標は存在しないが、引用という特徴を備えた当該文が表現主体

の判断を後続文に誘発しやすいといえるだろう。

当該文に表現主体の目的が示されている場合、後続文にその目的達成のための提案が予測できることが多い。これは、七章の「内面からの働きかけ↓実行」に並行するが、現実世界では目的達成のための行動がすぐに取れるのに対し、論理世界ではその目的が達成されるように呼びかける提案にとどまる。そのため、論理世界にかかわる予測は、現実世界にかかわる予測とはことなり、当為判断を表す「べきだ」「なければならぬ」「てはならない」「必要がある」「ざるをえない」といった評価のモダリティ形式が中心となる。また、論理的には、(35) のように「くなければならぬ」↓「(そのために) くなければならぬ」となる。

(35) 人間的な魅力を備えた都市はまずなによりも歩くことを前提としてつくられなければならない。  
 学校、病院、商店などすべて、公共的交通機関を使って利用できるように設計される。ジェイコブス的な街路は、道幅が広くなく、曲がっていて、一つ一つのブロックが短い。しかも、十字路的な交差点では、T字路を基本とし、歩道橋の類いは

原則として避けるように設計されなければならない。また、歩道と車道とが物理的に分離されてい  
ることは当然であるが、歩行者が直接自動車通行  
によって影響を受けないように、街路樹などに  
よって適当に遮蔽されていなければならない。

(世九七七頁)

当該文に対応すべき状況が示された場合、後続文でそう  
した状況を改善するような対応策が示されるのを予測する  
ことが多い。これは六章の「外界からの働きかけ↓対応」  
と並行するが、論理世界の文章では、表現の場に拘束され  
た表現主体が実際に現実世界に出て行って行動することは  
できないので、表現主体自身の主張として行動の必要性を  
訴えるという形を取るようになる。

対応すべき状況を示すはつきりとした形態的指標はない  
が、(36)の「すぎる」や「顕著だ」、(37)の「天文学的  
な水準」に表れているような、程度が行き過ぎてい  
ることを示す表現を含んでいることが多い。もちろん、その場合  
の対象は、「東京中心の中央集権制」「その弊害」「自動車  
の社会的費用」といった好ましくない事柄である。ぎゃく  
に好ましい事柄が対象のときは、「欠ける」「足りない」

「不足する」など欠如の表現が使われる。

(36) だが国では、伝統的に国家万能、東京中心  
の中央集権制に偏りすぎ、そのメリットよりデメ  
リットが、その弊害が、今や顕著であります。曲  
がった竹を真直ぐにするには、反対方向へ一度は  
うんと曲げなければなりません。その意味でも、  
私たちは「地方の時代」をあえて強調したので  
あります。(世七九六頁)

(37) 自動車の社会的費用は、経済的、社会的、文化  
的、自然的な側面にわたって多様な形態をとり、  
その大きさはまさに天文学的な水準に達している。  
各都市の設計はもちろん、全国的な交通体系の策  
定にさいしては、自動車の社会的費用が内部化さ  
れるように、自動車道路の設計、その建設費用の  
負担、都市におけるさまざまなインフラストラク  
チャーの建設、さらに自動車の購入、保有に対す  
る課税制度を考慮すべきである。(世九七四頁)

一一 おわりに

本章では順接の予測を、描写文を中心とした現実世界の

予測と、説明文を中心とした論理世界の予測とに分け、前者を四章から九章で、後者を一〇章と一一章で説明した。具体的には次のようにまとめられる。

(i) 外界の出来事↓結果 現実世界で、ある変化を引き起こしうる出来事が起こった場合、理解主体はその出来事の結果を後続文に予測する。

【形態的指標】「割れる」のような二次的な結果を引き起こしやすい変化動詞

(ii) 外界への働きかけ↓結果 当該人物が、その周囲にある人間以外の対象や状況に働きかけた場合、理解主体はその働きかけの結果を後続文に予測する。  
 【形態的指標】「たたく」のような二次的な結果を引き起こしやすい動作動詞、文末表現「てみる」、「調べる」のような探索動詞、「話しあう」のような討論動詞、「見上げる」のような知覚を目的とした動詞、「(襖を)あける」のような知覚を可能にする動詞、「近づく」のように当該人物の移動を表す動詞  
 (iii) 外界からの働きかけ↓対応 当該人物が、その周囲にある人間以外の対象や状況から働きかけを受

けた場合、理解主体はその働きかけにたいする当該人物の対応や心情を後続文に予測する。

【形態的指標】「できない」のような問題のある状況を表す文末表現

(iv) 内面からの働きかけ↓実行 当該人物が何かを實現しようという意志を持っている場合、理解主体は後続文にその実行が描かれることを予測する。

【形態的指標】「たい」などの希望・意志・当為を表す評価のモダリティ形式

(v) 他の人物への働きかけ↓反応 当該人物が、周囲にいる他の人物に働きかけた場合、理解主体はその働きかけにたいするその人物の反応を後続文に予測する。

【形態的指標】「尋ねる」などの質問を表す動詞、「相談する」などの相手の感想や意見を聞く動詞、「からかう」などの態度をとまなう伝達動詞、「なぐ」などの対人的働きかけの動詞、「要請する」などの行為要求動詞、「頼む」などの依頼を表す動詞、「提案する」などの勧めを表す動詞、「手を振る」などコミュニケーション上の働きかけを表す動詞、

「させる」のような使役表現、「てあげる」「てやる」などの授受表現

(vi) 他の人物からの働きかけ↓対応 周囲にいる他の人物が当該人物に働きかけた場合、理解主体はその働きかけにたいする当該人物の反応を後続文に予測する。

【形態的指標】(v)と同じ

(vii) 必然的論理展開の予測 ある必然的な論理展開に至るような、多くは複数の前提が示されたとき、理解主体はその前提から導き出される帰結を後続文に予測する。

【形態的指標】とくになし

(viii) 主観的論理展開の予測 その文を見たらある判断や感情を抱かざるをえないような、主観的な態度を誘発する力の強い文が示されたとき、理解主体はそこから得る主観的な態度を予測する。

【形態的指標】当為判断を表す「べきだ」「なければならぬ」「てはならない」「必要がある」「ざるをえない」といった評価のモダリティ形式、「あまりに」「すぎる」「欠ける」「足りない」などの過不足

を表す表現

(1) 話しことばであれば聞き手、書きことばであれば読み手を指す。

(2) 話しことばであれば話し手、書きことばであれば書き手を指す。

(3) 今読んで問題にしている文を当該文、すでに読んだ文を先行文、これから読む文を後続文と呼ぶ。

(4) その場において、その場面を認識している人物。視点人物と呼んでもよい。現在の時点でその文章を書いている表現主体とは区別されるが、過去の表現主体であってもかわらない。

参考文献

庵功雄(一九九九)「テキスト言語学の観点から見た談話・テキスト研究概観」『言語文化』三二六 一橋大学語学研究室

石黒圭(一九九六)「予測の読み―連文論への一試論―」『表現研究』六四 表現学会

石黒圭(一九九八a)「理由の予測―予測の読みの一側面―」『日本語教育』九六 日本語教育学会

- 石黒圭(一九九八b)「逆接の予測—予測の読みの二側面—」『早稲田日本語研究』六 早稲田国語学会
- 石黒圭(一九九九)「並立の予測—予測の読みの二側面—」『国語学研究と資料』二三 国語学研究と資料の会(早稲田大学)
- 石黒圭(二〇〇一a)「句の説明の予測—予測の読みの二側面—」『一橋論叢』一二六巻三号 一橋大学一橋学会
- 石黒圭(二〇〇一b)「格成分の説明の予測—予測の読みの二側面—」『一橋大学留学生センター紀要』四 一橋大学留学生センター
- 海保博之(一九八八)「こうすればわかりやすい表現になる—認知表現学への招待—」福村出版
- 佐々木瑞枝・嶽肩志江(二〇〇一)『予測して読む聴読解—現代日本事情に関する三八章—』アルク
- 寺村秀夫(一九八七)「聴き取りにおける予測能力と文法的知識」『日本語学』六一—三 明治書院
- 平田悦朗(研究代表者)(一九九七)『日本語学習者の文の予測能力に関する研究及び読解力・聴解力向上のための教材開発』平成八年度文部省科学研究費補助金基盤研究(B)
- (2) 研究成果報告書(課題番号〇六四五—一五九)
- 丸野俊一・高木和子(一九七九)「物語の理解・記憶過程における予測の役割」『読書科学』三二 日本読書学会

- Beaugrande, R. de, & Dressler, W. (1981). *Introduction to Text Linguistics*. London: Longman.
- Graesser, A.C., & Franklin, S.P. (1990). QUEST: A model of question answering. *Discourse Processes*, 13, 279-304.
- Oller, J.W. (1983). Evidence for a general language proficiency factor: an expectancy grammar. Oller, W.J. (Eds.), *Issues in language testing research* (pp.3-10). Rowley: Newbury House Publishers, Inc.
- (一橋大学留学生センター助教授)